

みやもとだより

第23号 平成30年3月発行

季節のおまつり

青柴垣神事



神懸かり状態の當屋

ゲゲゲの鬼太郎の作者水木しげるの故郷として有名な境港市から東に三十分ほど走ると、島根半島先端にある美保関に着く。北前船が行き交う関所として栄えた往時の宿屋や回船問屋が残り、時間が止まっているような気さえする。町の中央には大国主命の長男事代主命とその母神三穂津姫を祀る古色蒼然とした美保神社が鎮座する。事代主命は恵比寿様としても祀られるので、その総本宮である。

毎年四月七日、この町では「国譲り」に因んだ青

柴垣神事が行われる。その由来は、高天原から出雲の国に遣わされた建御雷神が、大国主命に対し

て国を皇孫に譲るよう迫ったことを発端とする。

大国主命は出雲の国の祭事を任せている長男に相

談すると、長男は譲ることを進言したあと、海中に青い柴垣を巡らせてお

隠れになつたという。

（写真・文 宮本卯之助）

事代主神と三穂津姫の役割りを、この神事では二人の「當屋」が担う。一年間の潔斎を終えて前夜から境内の会所で断食し、目を開けることも話すこともできない。神懸かり状態の二人は氏子に支えられ、種々の祭器を棒持してそれぞれの御船に分乗する。御船は四隅に榦を立て、周囲に幕を廻し注連縄で囲んで神域とし、その中で秘儀が執り行われる。湾内を渡御した一行は猿田彦や天鉗女に先導され、美保神社に帰殿して奉幣する。

海上に出た船に福をもたらす神を迎えて、新たな活力を授かる春祭りである。

帰りがけに美保神社から佛谷寺までの青石疊通りで太鼓屋の看板を見つけた。江戸末期創業の醤油醸造店であったが、先祖は美保神樂の太鼓の名手であつたとのこと。

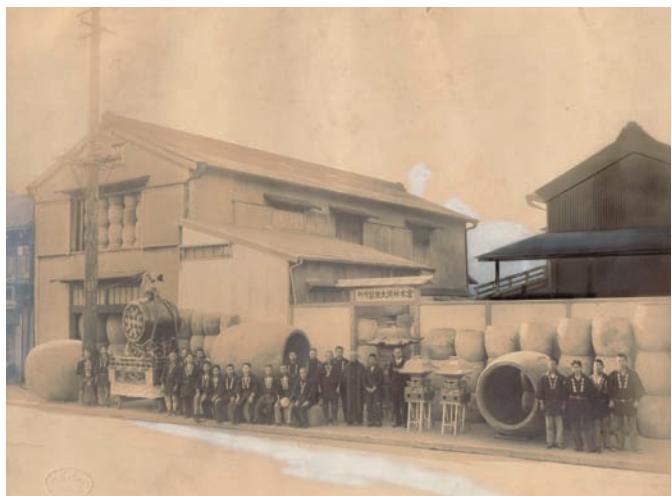
さらに苗字が太鼓さんとのことで二度びっくりしてしまつた。



御船の海上渡御

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

振り返る宮本の一枚



昭和八年 今戸工場前にて撮影

昭和八年頃（一九三三）、弊社今戸工場（台東区今戸二丁目九番地）で撮影された集合写真です。当時主な製品は太鼓でしたが、この頃神輿の製作を始めまして、神輿の木地が見られます。今戸工場では太鼓を製作し、出来上がったものは聖天町にある店舗に運ばれました。弊社では又、当時出征式に使う西洋ドラムやシンバルなども販売していました。

工場内には多くの太鼓胴が乾燥のため倉庫に保管され、こちらの写真では、撮影のため倉庫前面に太鼓胴が積み上げられているのがわかります。太鼓

胴の前には、着物姿の四代目卯之助と、一人置いて右に五代目を中心に当時の職人達が社名入りの揃い半纏を着ています。様々な大きさの太鼓胴がある中、大人の身の丈以上の太鼓胴の其の大きさがよくわかる一枚です。

浅草つれづれ はなし塚

浅草本法寺（台東区寿町二十九一七）

境内にあるこの塚、戦時に自粛対象となつた落語の台本と先人の落語家の靈を弔つた少し変わった塚です。建立は昭和十六年（一九四一）、当時太平洋戦争の戦時下では、時局に適さないとしてあらゆる芸能の一部演目が自粛を強いられていました。落語では花柳界や酒の嘶などが禁演落語とされ高座で聞くことができませんでした。その経緯から、当時の嘶家たちによつて禁演落語とされた五十三の台本と先人の落語家たちの靈を弔う塚が建立されました。古くから芸能と縁の深い浅草を感じさせるスポットです。



世界の太鼓館
「世界の太鼓資料館 太鼓館」開館三十周年記念として貴重な収蔵品をご紹介。

ネイティーブ・アメリカンドラム



アメリカには先住民族であるネイティブ・アメリカンの部族が多数あります。そのうちの一つオブジワ部族の片面張り太鼓です。皮面口径三十センチメートル、胴高六センチメートル。ボプラと白樺材を用いた八角形の枠の片面にエルク（大鹿）の皮を張り、手や小枝を使って打ちます。皮面には部族に伝わる神鳥であるサンダーバードと海のギャングと呼ばれるシャチが描かれています。このドラムは、平和運動家でネイティブ・アメリカンの子孫である故デニス・バンクス氏によつて家伝の太鼓を開館当時にお祝いとして寄贈していただきました。その時「この太鼓を百年間宮本へ貸す」と話され、その意図は彼らの風習でお互いの孫子の代まで仲良くしようという事と理解しました。人と人との信頼関係を大切にする思いを私どもも大切にしていきたいと思います。

なさそうです。

代表取締役社長 宮本芳彦

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	
〒111-1035 東京都台東区西浅草二十一 電話(03)3384-4122	
www.miyanoto-unosuke.co.jp	

デニス・バンクスさんとのご縁はアメリカ和太鼓の父と呼ばれるサンフランシスコ太鼓道場の田中誠一さん。そしてそのお二人に紹介頂いたGOCOさんは、私が入社して初めて担当させて頂いたお客様で、右も左も分からぬ頃に各地の舞台に付いて廻らせて頂きました。田中さんの情熱は、この数十年で全米に何百という和太鼓グループを誕生させ、裾野は今ヨーロッパにも広がっています。去る二月には弊社がスポンサーを務める第三回ヨーロピアン太鼓カンファレンスが開催され、GOCOさんを日本から講師として迎え、欧州十五カ国からの多様な参加者で賑わいました。和太鼓の人を繋ぐ力には、いつも驚かされるばかりです。アメリカに和太鼓が渡つて今年で五十年。百年のご縁も夢物語ではなさそうです。